福岡大学医学会ニュース

第15号

福岡大学医学会
福岡市城南区七隈
福岡大学医学部内
印刷　福岡印刷株式会社
福岡市博多区東那珂一丁目10-15

新風

昭和六十一年十一月以降本学へ赴任、または昇格された教授、助教授、講師の方に自己紹介をしていただきました。

内科学第一教授　西丸　雄也

福岡大学に赴任して十四年が経ちました。香椎病院から福大病院へと、医学部・病院の発展を眺めてまいりました。

出生は熊本県の北部の丘陵地帯で、四歳より十歳まで大牟田に住んでいましたが、疎開により帰郷。玉名高校から九州大学第二分校に進み、昭和二十八年の水害や、寮の集団赤痢など人並みの経験をして、昭和三十四年に卒業、九大第二内科（勝木司馬之助教授、黒岩義五郎助教授）に入局しました。大学院での研究テーマは脳動脈樹脂鋳型標本の作成観察でしたが、その他に、剖検例の脳動脈採取、久山町検診時の神経学的診察、入院患者のリハビリテーション指導、サイコメトリー（神経心理）の臨床検査、脳血管の電顕的観察、脳卒中日米共同研究での臨床のまとめと対象患者の追跡調査など、雑多な研究にかかわっていましたが、結局現在に続いている研究テーマは、疾病を臓器相関の立場からみる臨床的研究と追跡調査となりました。病院内での医療に止まらず、その治療法の長期効果、病者の家庭的、社会的問題をも学ぶことができる現在の研究手法に満足しております。

趣味は何もありません。ゴルフ、麻雀、囲碁、将棋すべて駄目で、運動神経の発達も悪いようです。学生時代は茶道部に属し、山歩きが好きでしたが、もはやご縁がなくなりました。目下、昨年暮に引越した住居の外廻りの調整に没頭しております。

泌尿器科学教授　有吉　朝美

私の祖父も親父も内科医でしたが、昭和三十四年に九大を卒業し、充実したインターンを終る頃、泌尿器科に進路を決めました。合理的な診断技術を持ち、病巣を自分の手で摘除できるという尤もらしい理由のほかに、親父が倒れた原因となった急患と往診が少ない科という不埒な意識もあったようです。

当時の泌尿器科は腹膜を破ったといってはインオペにする先輩もいる様な時代でしたが、その後の発展は誠に目ざましく、腎移植、副腎外科、下大静脈外科、上皮小体手術なども手がけています。その上、最近はエンドユロロジーと称して内視鏡的手術も普及してきました。毎日勉強の種が尽きることがありません。

これまで、私を育てて下さったのは、①故百瀬教授の積極性、②坂本教授の考える医療、③国立病院時代の責任感の体験、④UCLAでの最前線の医療経験などです。しかし、何といっても素晴しいのは多くの先輩、同僚、後輩と力を合せて診療をすることです。特に、他科の先生方と協力し、最先端の医療にチャレンジするのは何よりの喜びです。福大医学部病院に苦情を言いたいことは山程ありますが、この協力精神を基に前進し解決して行きましょう。

このたび、皆様の御支援あって教授に昇格しましたが、医療の原点は患者にあるという私の〝現場主義〟は変りません。一介の医者であるという初心を忘れず、気安く皆様の御相談に乗りたいと思います。

趣味といえば、昔から工作が好きで、本物のヨットや電気ギター、テジオなど作ったことを想い出します。音楽、スポーツ、カメラ、似顔絵などあれこれ嚙っていますが、自慢できる腕前のものはありません。大学では勉強も大切ですが、公私混同せず、もっとフェアーに大らかに休みを取って趣味を生かし、人生をエンジョイすることも大切なのではないでしょうか。人との触れ合いを最も大切な心の糧とし、サムエル・ウルマンの「青春」という名の詩にある如く、「青春とは人生のある期間ではなく、心の持ち方をいう。年を重ねただけでは人は老いない。理想を失うとき初めて老いる。人から神から美・希望・喜悦・勇気・力の霊感を受ける限り君は若い。」と思って前進してゆきましょう。

耳鼻咽喉科学教授　調　重昭

既に四半世紀を一昔もオーバーした昭和二十七年の九大教養部時代のことを思い出す。ゴールデン・ウィークがあけたばかりの星のきれいな夜空をあおいでいたら急に市房に行こうということになった。津村君（現武田姓・東京女子医大教授）ら山岳部の数人と夜行で八代に南下、一番列車で球磨川を遡り、人吉・湯前まで、さらにバスを乗り継いで湯山にたどりついた。コッペパンを嚙り、大きな杉や大きな岩の間を登って九州背稜の一角にたった時には右手に日向灘、左手に八代海を望める超一流の展望で、大学に入った自由さを満喫するとともに、これからの人生の広がりに身ぶるいしたものだった。

久留米篠山城の石垣でザイルをもてあそんだものの山岳部には入らずじまいであった。

そもそもの山とのなれそめは、郷里の日田中学校二年生の夏休みにはじめて登った九住山に魅せられて以来のことである。西日本一帯の山々を単独に、時には兄弟と、またある時は友達をさそってワンデルンした。山に行きたいばかりに東北は秋田の大館病院でインターンをして、医局は東北大学か北海道大学の外科と迷った末に九州に戻った。九大耳鼻科教室に入局して二年目に、秋田も十和田湖に近い小坂鉱山病院への半年間出張の機会があり、福島以北の山々はさらに親しいものになった。昭和四十三年から三年間のドイツ出張と、福岡大学からの三カ月間の短期出張（同じく西独）の折には、研究の余暇をみつけては、カブト虫やパサートを馳ってユーラシヤ大陸を馳けめぐった。乗物利用が多かったが、西独の山々、チロル、スイスアルプスへのアプローチも試みた。

昭和六十一年には九州背稜の山は七月の雨の国見と、十月の連休に市房に登った。冒頭書き出しの市房は実に三十五年ぶりの山であり、湯山の部落のたたずまいや登山道に昔の記憶をたぐり寄せえた所もあり、好天候にもめぐまれた山旅の二日間であった。しかし頂上に立った時には丁度の三日、四日と傾山山系に出掛けた。移動し、よじ登り、よじ降りて、トッキン・五葉岳・大崩山とアケボノツツジを求めた。快晴の五月四日、午前十一時、大崩山頂でカンビールをぐっとあおると、直ぐ頭上に満開のアケボノツツジがあった。

病理学第二助教授　坂田　則行

私は、本年一月から福岡大学にお世話になっております。こちらに赴任してまだ日も浅く、わからない事も多々ありますので、学内の皆様に何かと教えていただきたく思います。よろしくお願いいたします。

さて、私の自己紹介ですが、私は昭和四十八年群馬大学医学部を卒業いたしました。卒業後は基礎医学を勉強してから臨床医学を目ざそうと考え、母校の病理学教室に大学院生として入室しました。当時、教室は全員が血管病変、ことに高血圧性動脈病変や動脈硬化の研究に取り組んでいました。この頃、高血圧性動脈病変としての中膜壊死の発生病理に関しては、様々な学説が提唱され、その一つに物理的（機械的）因子の役割が注目されていました。私は、教室員の一人として、物理的な血管内圧上昇が動脈中膜平滑筋細胞に与える障害作用に関する研究に従事しました。幸いにも、四年間で学位論文を提出し、無事大学院の課程を修了することができました。その後は、母校の中検病理で三年間、また昭和五十五年から去年まで第二病理学教室に在職しました。この間、大学院時代にいただいた研究テーマとの関わりから、動脈病変ことに動脈硬化の発生、進展と血流との関係について研究して来ました。こんな訳で、卒業当時抱いていた臨床医学への道は、もろくも潰え去ってしまったのであります。しかし、一方では、この間の研究を通じて、他の分野（生理学、生化学、工学など）の研究者と知り合い、共同研究を行うことにより、医学の抱えて来た問題に新らしいメスが加えられ、一つ一つ視野が広がってゆく快感を味わうことができました。これからも、この快感を追い求めて行くことになることと思います。

さて、趣味ですが、現在はコンピューターをいじることが楽しく、いろいろなソフト（ゲームソフトではありません）を遊び気分で試しています。これからは、自分の仕事に合ったプログラムが作れればと思っています。また、スポーツでは水泳をよくします。福岡大学には立派なプールがありますので、是非時間をみつけて泳ぎたいと思っています。

これからは、福岡大学の教職員の一人として大学にいく分かでも貢献していきたいと思っております。

衛生学助教授　畝　博

出身は岡山県北部の山の中です。いかに山の中であるかは、小学校の修学旅行ではじめて海を見た、という事実で推察していただけると思います。昭和四十六年、岡山大学医学部を卒業し、四年間ほど高知県の県立病院に勤務しました。その後、一年間大学で麻酔の勉強をした後、岡山大学の衛生学教室に入りました。というような訳で、かなり回り道をして、衛生公衆衛生学をはじめたことになります。

岡山から福大に赴任して約八年になります。公衆衛生学教室の前の助教授和気健三先生の甘言に惑わされたのが、福大に来るきっかけでした。「特別のデューティーはないし、好きな本でも読んでいてくれたら、それでよいから」という魅惑的な条件であったため、二～三年福岡に行くのも悪くないんじゃないかという軽い気持で赴任しました。居心地がよかったのか、すっかり腰を落ち着けてしまいました。

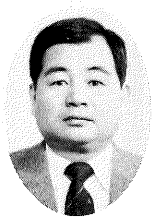
衛生公衆衛生学は非常に広範で、多岐に渡っており、担当者自身が困惑してしまうほどです。その中で、産業保健が私の主な研究分野で、必然的に講義もその分野を担当しています。産業保健の分野に進むきっかけは、高知の県立病院勤務時代の経験に基づきます。私の勤務した病院は、過疎地域の僻地中核病院でした。今から十数年前ですが、その当時ですでに、この地域の老年人口の割合は二〇％を超えていたと思います。病院のあるわずかばかりの市街地を除くと、若者はすべて都会に出て、老人ばかりといった状況でした。病院の機能上どうしても老人との付き合いが多いのは、仕方のないことですが、高齢社会がいかなる社会であるか、を垣間見てしまいました。私の勤務していた病院は、僻地中核病院という性格上、地域住民の健康管理にも力を入れておりました。老人を診るのに飽いたというのが実感でしたので、老人ではなく、働いている人達を対象とした保健活動を試みはじめました。高齢社会の入口にさしかかっている現在の医学生諸君には、高齢社会に耐えて行く強い意志力と人生の先輩である老人を敬う心を持つことが要求されています。私が老人になった時、暖い看護を受けるためにも。この地域で、特に労働との関係で健康上の問題があったのは、出稼ぎに出る農民とか、遠洋漁業に出る漁民とか、多量の農薬を散布するハウス従事者とか、チェンソーを使用する代木労働者というような人達でした。その中でも、チェンソーを使用している代木労働者に見られた白ろう病は、当時高知県下全体に猖獗をきわめており、彼らの検診とか、環境測定とかを手懸けるうちに次第に産業保健に興味を持って行きました。

現在、じん肺、振動障害（白ろう病）、農薬中毒、有機溶剤中毒等の職業病の研究を中心に行っています。これらの職業病は、いずれもいわゆる重厚長大産業や第一次産業においてみられるものです。こうした重厚長大産業は、円高と貿易摩擦によって産業の空洞化現象がいわれていますが、その重点は日本から他のアジア諸国に移って行くことが予想されます。そういう日本経済の国際化に伴って、産業保健の分野もますます海外との共同研究や保健活動の協力が重要になって来るものと思います。十年後には、中国の上海あたりの汚い工場の産業医をしているというのが、私の夢ですが、そこまで国際的交流が進むのは、少し荒唐無稽な話でしょうか。

筑紫病院脳神経外科　助教授　田中　彰

長崎県松浦市という片田舎に生まれ、育ち、長崎東高校をへて九大医学部に進み、昭和四十二年に卒業しました。脳神経外科に入局し、大学院生として薬理学教室で勉強したあと、四十六年から二年間アメリカNIHに留学しました。四十九年から、福大にきて、六十年七月より筑紫病院で働いております。

筑紫病院では現在、それまでの大学生活とはひと味ちがった経験をしています。医学とは、サイエンスでありそこには〝真理の探求〟以外の邪念を排除する厳しさと清潔感があります。一方医療では、相手が感情をもった人間であるが故に、1＋1＝2とはなりにくい、複雑さがあります。相手が患者だけでなく、まわりの医療機関や関係機関の人々であれば、なお複雑です。しかしよーく考えてみると、それはそんなに複雑なのではなく、俗にいうヒューマンリレイションシップの問題です。〝相手の心の痛みを、自分の痛みとしてとらえることができれば、自分の痛みも相手はわかってくれる。人を許してやることができれば、自分も許される〟とは、古き友人である神父さんの言葉です。つまり、人間的心の豊さ、大きさの問題です。医療が高度化、専門化し、一方患者が医者を選択する時代になればなるほど、この人間的資質に対する問いかけは、高まるものと思います。人間的資質のない者に、医師免許証をもたせて、世に送りこむことは、まさしく社会問題です。その意味でも、医学教育機関が社会に負っている責任は、計りしれず大きいと痛感します。



最近ドイツ、スイスをまわってきました。アメリカでもそうでしたが、彼らの特徴は、それぞれの医療活動に特色、個性がある一方、システムが完備していて、内外機関と有機的に連動しながら動いていることです。筑紫病院も一日も早く総合病院化して有機的活動の中に、何か生産的なものが、できていけばと、願っています。

外科第一講師　吉本　英夫

私は、佐賀市に生まれ育ち佐賀西高等学校を卒業後、昭和四十五年に、鹿児島大学へ進みました。学生時代はジャズとマージャンが記憶に残っているばかりです。昭和五十一年に卒業し、九州大学第一外科に入局しました。その後四年間、臨床修練のため九大病院・国立小倉病院・唐津赤十字病院・国立中津病院と各

（二頁へつづく）

（一頁よりつづく）

地を転々とし、昭和五十五年から、当時、九大医療短期大学におられた池田靖洋先生（現福大一外科助教授）のもとで、四年間、主に胆膵の内視鏡診断と治療を勉強させて頂きました。昭和五十九年、唐津赤十字病院へ再び赴任し、三年間、外科医として勤務後、六十二年四月から当院の一外科に籍を置かしてもらうことになりました。私は、酒は到って不得手ですが、タバコとコーヒーが大好きで、何度か禁煙を試みたのですがなかなかうまくいきません。師匠の池田先生から以前はタバコのことを叱られたのですが、近頃は怒られなくなりました。しかし、最近は病院での喫煙が厳しくなりつらいところです。スポーツは中学から高校にかけ水泳・野球・ラグビーなどをやりました。卒業後はゴルフに少し凝ったのですが、忙しいのといつまでも上達しないのでやめてしまいました。

昭和五十九年に唐津赤十字病院に赴任してからの3年間は、胆膵に関しERCP・PTCD・胆道鏡が三位一体となった医療に専念しました。唐津は胆膵の症例が豊富なこともあり、ERCP・ESTは三年間で述べ六百例以上、エコー下の穿刺やドレナージも約百例を施行しました。おかげで、胆道鏡下の胆道精査や電気水圧結石破壊法などの手技を自分なりに体得することが出来ました。しかし、胆道系の症例が集まるにつれ、自分でもどう手術すべきかわからないような胆道癌の厳しい症例を経験するようになりました。この度、福大で仕事をできる機会を与えてもらいましたので、諸先生の御指導を受けながら胆道癌の問題に取り組みたいと考えています。

外科第二講師
左野　千秋

昭和六十二年四月一日付で外科学第二教室のお世話になっております左野でございます。自己紹介をさせて戴きます。私は昭和二十六年壱岐の島で生まれました。小学、中学、高校と壱岐で過しました。今と違って当時は医師不足が深刻で、私は離島医療対策の医学生奨学金制度によって昭和四十六年北里大学に入学致しました。おかげで生活は貧しいながらあまりお金のかからない六年間を過すことができました。大学時代はもっぱら空手に熱中し、日本武道館で行われた全日本空手道選手権大会の学生の部でベスト8に入ったこと、在学中に二段を取ったことなどは今となってはよい想い出になっております。昭和五十二年四月から、九州大学第二外科井口潔教授の下で外科学の研修を始めました。そこで知ったのが現在、福大第二外科助教授の神代龍之介先生でした。あらゆる御指導を受け、いろいろなトラブルを親身になって片づけて戴いたもので、今だにそれが続いております。学位は昭和五十九年に Promoting Effect of Partial Gastrectomy on Carcinogenesis in the Remnant Stomach of Rats after Oral Administration of MNNG という拙著で授与されました。いわゆる残胃癌発生に及ぼすプロモーター作用に関して実験したもので、九大では胃・大腸癌グループの一員として研究しておりました。二年間というものは正月も休まず朝から晩までラットの胃切除をした苦しさは今でもほろ苦く想い出されますが、五百匹を越える数のラットに胃切除を行い、ビルロートI法・ビルロートII法・Roux Y 法などで再建を成功させたことは、人間の手術をする上で、いささかの自信を与えてくれたように感じております。学位を授与された後は故郷に帰って離島医療に微力ながら尽していたのですが四年間の就業義務年限のうち三年間勤務した時点で、急遽こちらにお世話になることになりました。九大時代の恩師井口潔名誉教授、杉町圭蔵教授、現福大二外科神代龍之介助教授、福大での犬塚貞光教授とすばらしい学者に師事できたことをあらためて喜んでおります。私はまだ未熟者ですが今まで先輩達が築きあげた第二外科の業績を更に伸ばすために頑張る所存ですので宜しくお願い申しあげますと共に、皆様の御指導をお願い申しあげるしだいです。

脳神経外科講師
岡　一成

本学には今度で二度目の勤務になり出戻り息子であります。一回目は、麻酔科比嘉、泌尿器科平塚両君らと研修医（月収五万）として一年間（昭和四十九年）勤務しました。この時、朝長教授に脳神経外科の introduction をうけ、澤田、福島、田中先生等から脳神経外科医の厳しさを指導されました。

昭和五十年四月より九大大学院に進み、田中健蔵教授の下で線溶現象の病理の指導をうけ主に肝疾患と消化管出血を線溶亢進の面から研究し博士号を得ました。凝固・出血性素因に関心のある脳神経外科医としてのスタートでした。これだけだと皆にバカにされますので田中教授のもう一つの柱である脳血管障害の方にも目を向け、モヤモヤ病の剖検例を検討し、この疾患の死因の重要な因子が脳内出血であり、モヤモヤ血管の破綻であることを組織学的に証明できました。この研究で後に日本脳神経外科学会より第一回ガレヌス賞を受賞することになりました。田中教授の口癖に、〝世界一は世界一だが、日本一は世界で何番目かわからない〟があり、世界に通用する仕事をするよう厳しく指導されました。若い方々も、独創的な発想で人の気付かない面から独自の研究をされるよう、また外国のことをそのまま日本にもってきて自慢するのは明治時代の人間と思われてもしかたがないと考えてください。

昭和五十八年より二年間、フロリダ大学ロートン教授の下で、微小解剖（顕微鏡手術のため）の研究と血管吻合の技術を習熟しました。世界一流の脳外科医の手術、治療方針、医師としての哲学に接することができるとともに、世界中から来客があり各国の脳神経外科の現状・情報を手に入れることができました。一流の人に接することは並の人間でもそのレベルに近づく可能性を与えられると思います。若い方々も積極的に外国の方と接せられるよう助言します。

昭和五十四年より北村勝俊教授の下で脳神経外科医としての鍛練を積みました。北村教授は患者治療の方針を立てるにあたり、自分の治療方針を確立して、それを維持するよう努力すべきで目の前に甘いものがあるから飛びつくことを厳しくいましめられました。脳神経外科医としての厳しさと己の技量を知れということだろうと理解している。

私個人は師に恵まれ、兄弟子に恵まれ現在があるわけで、自分が精進するとともに後輩達に自分の受けた恵みをいかに十分に伝えられるかが自分の課題だと思っている。学内の皆様の協力を得て、世界につうじる脳神経外科教室にすべく努力する覚悟でありますので皆様の御支援・御協力をお願いします。

皮膚科講師
一木　幹生

私は生まれたのは北九州の八幡ですが、すぐに福岡に移り小、中、高校時代をそこですごしました。大学は久留米大学に行きまして無事に六年間で卒業しました。それからの進路については、どこの医局にはいろうかと散々悩みました。現在ではマイナーに進む人も数が増し、多人数をかかえる医局も珍しくはないですが、当時は内科や外科などのメジャーな科目に進む人が多く、基礎はもちろんマイナーに進む人は数が少なかったものでした。結局私が皮膚科を選んだのは全く単純な理由によるものですが、今では皮膚科を選んだことは幸運であったと思います。皮膚科というのは難解な漢字が多く、見た目も悪く疾患自体も地味な病気がほとんどで、あまり派手な所はありませんが、一度その中にはいってみると、なかなかおもしろいものです。特に近年生化学、細胞生理及び免疫学の進歩は著しく、その皮膚科への応用により、いままで不明とされていたことがしだいに明らかにされ、昔に比べ皮膚科もより科学的になり、経験だけではなく、理論的な考え方も必要となってきています。私は元来怠け者の部類に属するようで、昔からおしりに火がつかないと行動しないところがあり「明日できることは今日しない。」という言葉を友人にもうそぶいておりました。ところが同じ言葉を形成外科医の心得として教科書に書いてあるのをみつけた時は、うれしくもあり、またびっくりしました。その言葉は私の足をかなりひっぱったことは十分に承知しているのですが。

泌尿器科講師
平塚　義治

私は昭和二十三年久留米市で生まれ、昭和四十八年長崎大学を卒業、その年に開院された福大病院の第一回研修生として採用され坂本教授のもとで昭和五十九年五月迄福大に在職していましたが、その後田川市立病院へ出向き昭和六十二年四月より再び福大へ戻り現在に至っています。したがって私の医師としての略歴は福大病院とともに歩んだ形ですが開設時クーラーがないため夏研究室が暑く肌着一枚とうちわで過したことや建設されたばかりで塗料の匂いが鼻についたこと、蛙の鳴き声がうるさかったことなど、また人が少なかったため当然でしょうが各科との隔壁が現在より少なく蛾が多く自分達で網戸を造っていたら『何をしておられますか』といって脳外科の朝長教授が突然見にこられたり（当時は脳外科医局は隣でした）、手術をしながら麻酔の先生と野球の計画をたてたり（ちょっと不謹慎ですね）、耳鼻科の医局旅行に入りこんだり等々楽しい思い出が沢山です。この福大も開院十五年目を迎え壮年期に入ったものと思いますがいい面が定着すると同時に動脈硬化もおこりつつあるのではないかと思います。医師過剰時代の到来とともに医療は確実に変わりつつありますが大学病院として時代の流れにすぐ対応できるシステムづくりも必要な気がします。

私の専門は泌尿器科学の中でこれといってなく、如何に自分が浅学であるかを思い知らされ恥ずかしいかぎりですが腎臓とくに腎不全や水、電解質代謝については入局時より興味をもっており今後一般泌尿器科の知識をさらに深めるとともに素晴しい働きをもつ腎臓をもう少し追求してみたいと考えています。年も四十才近くになりましたが『若くあるためには易きにつこうとする心を叱咤する冒険への希求がなければならない』という先人の言葉をモットーに今後とも日々努力したいと思いますのでよろしくお願いします。

趣味はゴルフとテニスです。どちらも下手の横好きでおまけにほとんど練習をしないため、いつまでたっても少しも上達しません。このたび昭和六十二年四月一日付けで福大へ転勤となり今までとは全く異なる立場で仕事をしなければならず、また当地では知人もほとんどいないさびしい状況におかれた不束者の私ですが、できるだけ先にのべたモットーを尊重しながらやっていきたいと思います。

産婦人科講師
井槌　邦雄

私は広島で生まれましたが、私の記憶は父の仕事の関係で約十年間を過ごした九州大学内の官舎から始まっており、以来福岡を出たことがありません。昭和四十八年、修猷館高校卒業後、出来て間もない福岡大学に入学し「あと六年この道を通学するのか。」と思った道を、十四年間通い続けて今日に至りました。昭和五十四年、医学部の二回生として卒業し、あっという間に福大産婦人科教室に入局させて頂きました。何しろ国家試験を終えて帰宅するなり、電話のベルが鳴り、下働きの者がいないので明朝より出仕すべしと厳命を頂き、そのまま休みなしでしたから、私が今になってもまだ学生気分を引きずっているのは、この時区切りをつけられなかったことに起因しているようです。福大病院で研修医をさせて頂いた後、臨床とは関連が少なくても、そのぶん勝手な想像が許されることに魅力を感じ、生殖免疫という分野を選び、福大の大学院に入学し、白川教授の御指導と御紹介で、九大生体防禦医学研究所（当時は癌研といっていました）免疫部門の野本教授の下にお預け頂き研究を致しました。ネズミを追い回しているのどかな年月でしたが、生殖免疫のうちでも最もマイナーな殆児免疫系の発達という分野に次第に興味が出て来たのは、一つの現象におよそ無数の可能性が存在することと、ほとんどやっている人がいないためでした。卒業後の昭和六十年福大に助手として採用となり、今、卒業後八年目の春が過ぎようとしています。本業と趣味、臨床と研究、産科と婦人科、バランスよくこなしていこうと思って何も成し得ず、ひたすら恥じ入ります。今後ともよろしくお願いします。

産婦人科講師
和泉　秀隆

昭和二十六年、福岡県久留米に生まれ、以来筑後人として育ちました。久留米大学附設高等学校より九州大学に学び、昭和五十一年卒業した後産婦人科に入局し、佐賀、宮崎、北九州と転勤を繰り返し、この都度、福岡大学に赴任しました。野戦病院的な診療のみを主体とした病院を、ほぼ一年毎に経験してきました。その間、ゆっくり腰を落ちつけて勉強できたのは、九州大学の栗山教授の主宰する薬理学教室であります。

薬理学教室では子宮平滑筋の基礎的研究に従事。筋肉の収縮、弛緩は細胞内Ca濃度に依存しているわけですが、子宮平滑筋の細胞膜下レベルでのCa動態を、skinned-fiber を用いて研究しました。平滑筋の skinned-fiber とは、界面活性剤であるサポニンにて細胞膜に小孔を開け、細胞外より投与したCaにより細胞内Ca濃度を調節し、細胞内環境を、外から調節することにより、収縮・弛緩のサイクルを起こす技術です。私の基礎研究室における四年間の成果は、以下の様になります。rat では妊娠の進行に伴って、収縮蛋白のCa感受性が高くなる。これを平たく言うと、収縮を支配する細胞膜内の second messenger をCaとすると、妊娠の進行に伴い子宮は暫時収縮しやすくなる、という事になる。予定日近くまで妊娠を維持し、一転して陣痛が起るという合目的性に関して細胞膜下でのCaの調節機構が必要となる。他の平滑筋から考えて、筋小胞体をその機構とするのが一般的である。筋小胞体へ研究を進めようとした時、基礎四年間のタイムリミットがきてしまい、臨床医へと戻らざるを得なかった。一つには、そのまま基礎教室に残る事も考えたのだが。

今後の抱負を述べます。私の経歴で大学病院の臨床医として過した期間は短く、診療のみに従事した期間と研究のみに従事した期間は、はっきりと分かれる。言うまでもなく、大学病院は、診療、教育、研究の三つの部門から成り立っている。私の中でこの三部門を同時に行なう事は経験がなく、殊に今までやってきた基礎的研究と臨床間のギャップを埋めていくことが、今後の私の課題であります。臨床のレベルでは、子宮筋の研究が陣痛の制御へと結びつき、分娩がよりたやすく、理想分娩へと近づく事を願っている今日、この頃であります。

救急部講師
鳥谷　裕

元来、犬・猫などが大好きでしたが、学生時代は、もっと大きな動物とつき合ってみたくなり、人間を通り越して馬を知るべく馬術部に籍をおいていました。もっとも、馬術をやり始めた動機の7～8割は、貴族の遊びと思われるものがどの様なものかを知り、将来不純な考えに走った場合、何等かの武器になるのでは―等というものでした。

しかし、実際に馬の相手をしてみて、馬に食事をさせるまで人間の食事はおあずけ、毎日大便と小便にまみれた馬小屋を掃除し、試合になれば3～4日馬小屋に泊り込み馬と添寝、その間風呂にも入れず、次第に身の回りを蝿がたかるようになり、実に悲惨な生活の繰り返しであると気付いた時には既に手遅れで、このような環境に完全にとけ込んでしまい、むしろその中で生活することの快感を他人に説いてまわる立場の人間に変貌を遂げていました。しかし、添寝をし、餌をやり、試合前には何日間も同じ馬で障害を飛ぶ練習を繰り返し、試合で見事に障害を飛越してくれた時には、もし相手が女性であったなら、思いきり抱き締めてやりたいような気持ちになるものでした。

こんな事を繰り返していたために、学生時代には学問に励む暇がなく、なんとか最短距離で卒業はしたものの、見事に国家試験に失敗し入局出来たのは昭和五十二年の秋でした。

医者になってからは五年間ほどは何をするでもなく過ごしてしまいましたが、現在は食道静脈瘤・消化管出血及び消化管疾患・小児外科を中心に仕事をさせて頂いております。

昭和六十二年四月からは、新設された救急部に籍を移しておりますが、今後とも宜しく御指導・御協力下さるようお願い申し上げます。

海外便り

クリーブランドクリニックより

辻　祐治

五月に入り、ここオハイオ州クリーブランドも木々の緑が目にまぶしい季節となりました。なにやらゴルフの衛星中継のような書き出しになってしまいましたが、寒がりの私にとってはこちらに来て以来ずっと冬が続いていたようなものでしたので、春（というより初夏）の到来は嬉しくてなりません。昨年の9月より福大の元講師で現佐賀医科大教授の真崎先生の御推薦でクリーブランドクリニックのDr. Ferrarioのもとで腎血管性高血圧症の研究に従事していますが、クリーブランドといっても一般に馴染みが薄いことと思います。五大湖のうちのエリー湖に面した中都市でかつては工業都市として一世を風靡したらしいのですが、お定まりの不況ですっかりさびれてしまった町です。しかし街のそこここにかつての名残を見ることができ、昔はさぞや栄えたことだろうと感じさせますし、景気も悪くなるところまで悪くなったのか、このところ少しずつ息を吹きかえしつつあるようで、映画「ビバリーヒルズコップ」の中でのエディ・マーフィのセリフにあるような治安の悪さというのも以前に比べると格段に良くなったようです。そういう町で経済的にも大きな部分を占めるクリーブランドクリニックですが、米国の他の施設と同様に多数の日本人が研究に従事しています。福大からも私の他に、二内科からDr. Burmpusのところへ浦田先生、Dr. Fouadのところに今村先生（仁位先生の後任として五月から）が来られており、思いがけず五十五年卒の三人が集まり心強いかぎりです。研究施設については留学されたどなたもがおっしゃるように目をみはるような立派な機器が並んでいるわけではなく、全般的には福大の総研の方が充実しているように思います。噂に聞いていた手術場についても、確かに素晴らしいものですが、福大アニマルセンターのシステムをほんの少し改善すれば充分比肩しうるのではないでしょうか。

訳の分からない英語で色々と注文をつけるものでTrouble Makerなどというありがたくない渾名を頂戴し、進まぬ仕事にあせりを覚える毎日ですが、三月までミシガン大におられた教室の大島助教授をはじめ福大の先生方が全米で活躍しておられること、さらに二外科の犬塚先生ではありませんがクリーブランドの他にテキサスの松永先生、フロリダの諸江先生と五十五年卒の皆がこちらでも頑張っていることは何よりの励みとなっています。とりとめのない近況報告になってしまいましたがクリーブランドクリニックの詳細については他の二人に第二報をお願いすることにしたいと思います。

昨年建設されたNew Buildingと呼ばれているクリーブランド・クリニックの外来棟

教室紹介

福岡大学外科学第一

外科学第一講座の近況を報告いたします。当教室は昭和48年4月志村秀彦教授の着任以来、教授の名聲を慕う入局者が相次ぎ外科系屈指の医局となりました。昭和60年7月福岡大学筑紫病院開設時、外科部長には教室から有馬純孝助教授が就任その下に現在7名が出向しています。また昭和62年6月、福岡大学病院に救急部の開設に当っては鳥谷裕講師が外科系のチーフとして着任その下に医員2名が出向して頑張っています。

新設の医学部や医大にとって、卒業生の修練の場となる関連施設の確保は非常に重要な問題ですが、現在教室の関連施設とされるものは16を数えます。学内学外で広い分野での修練が可能となっています。

志村教授はライフワークである「胆石症の研究」で昭和56年西日本文化賞を受賞されましたが、教室内では胆道、肝臓、膵臓、消化管、小児、乳腺内分泌、それぞれにチーフを置き、診療研究を行い学生の教育に当っています。外科の忙しさは独特ですがそれだけに喜びも大きく、一にも二にも患者さんのことを考えてと言う志村教授のモットーのもとで全員それぞれの分野で頑張っている教室です。

医局の行事は一月一日、教授邸での年賀に始まり、一月中旬家族同伴の新年会は関連施設へ出張中の教室員も参加して賑わいます。六月には新入医局員歓迎の医局旅行で浩然の気を養い、七月の海水浴では盛大な花火大会が恒例となっています。秋には九大一外、鹿大二外、久大二外と四外科対抗の野球大会、硬式庭球大会が行なわれます。野球ではまだ優勝経験がなく、一年でも早い優勝が念願です。

昭和62年10月は志村教授が日本臨床外科医学会総会を主催、福岡市で総会が開かれますが、教室では日夜その準備に追われています。

（文責　内田）

教室紹介

福岡大学解剖学第一

解剖学というと来る日も来る日も人体を切り開いてばかりいる学問ととられがちですが、実は、人間と接する時間より動物と接している時間の方がはるかに長いのです。私達は学生実習の合い間を縫って比較解剖を主に行っています。比較解剖というのは、種々の動物を実験材料に動物間の進化の過程に伴う構造上および機能上の変化を解明しようという学問ですが、我が教室においては、その中でも中枢血管系における神経支配に取り組んでいます。そのため実験室内にはフナ、カエル、カメ、ヘビ、ニワトリ、数種の小鳥、鼠などなど様々な動物達が同居しており、さながらペットショップの如き様相を呈しています。早朝などは小鳥のさえずりが廊下の隅々まで響きわたり、時として殺伐たる雰囲気になりがちな私達の心を幾分でもなごませてくれています。さて、ここで我が教室の陣容についてお話ししましょう。第一解剖学教室は田川教授、亀田助教授以下、専任助手二名、院生三名、教育技術職員二名と他の教室と較べても小じんまりとまとまった陽気で気さくな教室です。もっとも一部の学生達からは「赤ずきんちゃんと懲りない面々」などとも呼ばれているようですが…。ハッキリ言って私達は「解剖なんて!!」と思っている貴方が大嫌い!!　卒後の進みたい方向が見出せずに基礎医学をもう一度勉強してみようと思っている貴方や画像診断における解剖学の重要性を再認識している貴方が大好きです!!　そんな貴方や貴方、私達と一緒に人体の神秘を追求してみませんか？　私達はいつでも諸手を挙げて歓迎しますョ。

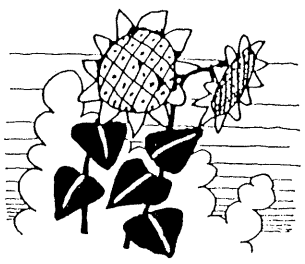
（文責・黒田）

第八十一回 医師国家試験合格者

昭和六十二年四月四日、五日に行なわれた第八十一回医師国家試験に本学から百五十九名が受験し、百二十三名が合格した。合格率は七十七・四%であった。

合格者の研修先は（福大病院研修生は科名のみ）次のとおり。

青木　茂　浜松医大産婦人科
赤井　護　香川医大外科
秋満　俊介　内科二
浅野　史也　眼科
市来　秀一　鹿大内科二
糸井　仁　健康管理科
伊藤　正訓　精神科
伊藤　裕　山大整形外科
井上　隆　九大外科二
井上　俊孝　外科一
上野　裕史　福岡徳州会
江島　正顕　東京国立第二
岡野　里香　広大小児科
緒方　宏之　熊大内科二
金武　康文　健康管理科
金田　規嗣　大分医大耳鼻咽喉科
衣笠　哲史　外科二
木村　隆行　内科一
木村　泰司　熊大内科二
楠原　浩之　内科一
合志　光史　小児科
坂田　俊文　耳鼻咽喉科
佐々木康人　熊大内科一
志賀　宗祐　眼科
重村　剛　外科一
志々目光宏　九大放射線科
四宮　幸子　九大内科三
渋江　有恒　内科一
首藤浩一郎　大分医大外科
新関久仁子　広大内科一
鈴木　智美　精神科
関　興二　精神科
武末　淳　耳鼻咽喉科
田里　寛　京大小児科
田中　敬一　長大皮膚科
田端　雅彦　群大小児科
仲田　広敬　熊大内科一
中村　淳　福岡徳州会
中村　信之　沖縄中部病院
中村　正直　内科二
永田　治　九大産婦人科
長田　邦彦　鹿大眼科
永光　春美　放射線科
西岡　義幸　健康管理科
野村智二郎　九大脳神経外科
橋口純一郎　長大内科二
鳩野　長房　内科一
菱山　博樹　九大心療内科
深川　康裕　福岡徳州会
藤岡　嗣朗　京都府立外科一
藤原　孝恵　九大産婦人科
北条　香織　阪大内科三
本庄　考　産婦人科
松原　好宏　九大整形外科
松前　知治　内科二
松本　一郎　小児科
三原　圭司　長大整形外科
三原　千拡　麻酔科
見山　文明　福岡徳州会
持田　和幸　外科二
森　寿治　外科一
師井　位栄　熊本日赤
矢野　文良　九大放射線科
山上伸一郎　順大内科
山崎　宏　九大内科三
吉武　研三　整形外科
吉武慎一郎　九大麻酔科
吉武　裕明　外科二
岩崎　一平　精神科
小貫　圭介　愛媛大内科二
香月　まこ　久大内科一
清沢　敦子　眼科
宿里　芳孝　健康管理科
島田　清　熊大産婦人科
田原　敬士　整形外科
仲　淳一郎　鹿大内科二
中島　浩昭　内科一
内川　徹也　長大外科一
冨田　明彦　宮医大内科二
水間　陽一　放射線科
興田　欣生　内科二
大隈　健司　内科一
小柳　邦夫　精神科
徳留　雄二　鹿大内科二
前田　俊一　鹿大整形外科
有馬　博隆　鹿大整形外科
池田　宏　整形外科
犬束　浩二　外科二
上野毅一郎　九大外科二
王谷　英仁　鹿大産婦人科
郭　明烈　小児科
五島　優子　九大眼科
柴田　憲助　外科二
立川　隆義　長崎中央病院
田中　誠司　佐医大産婦人科
二宮　正幸　久大小児科
藤田　節也　皮膚科
本庄　正澄　眼科
三原　宏之　内科二
宮城　司道　耳鼻咽喉科
米田　敏　外科二
池永　健　長崎中央病院
久原　克彦　内科一
詫摩　和彦　長大内科二
赤司　和彦　麻酔科
岩永　宏樹　久大外科一
岩村　司郎　産婦人科
松村　洋　健康管理科
小山祐之介　産婦人科
手山　知行　山大産婦人科
長浜　俊一　鹿大外科一
和田　郁子　佐医大内科
伊井　千景　熊大麻酔科
江口　武夫　徳大耳鼻咽喉科
永山　一成　宮医大内科二
平野　哲也　熊大整形外科
米田　利弘　久大麻酔科
柳瀬　圭史　九大内科
伊藤　裕子　健康管理科
福崎　誠　鹿大
山口　卓朗　長大眼科
杉　紀賢　眼科
冨田　寿三　長大産婦人科



来訪

昭和61年11月以降、本学医学部または病院を訪れた外国人学者はつぎのとおり　①所属　②目的　③来訪日

Dr. Roy Menninger, Dr. Donald Colson, Dr. Stephen Jones, Dr. Tetsuro Takahashi, Dr. Dean Collins　① Menninger Foundation　②メニンガー国際ワークショップ参加のため　③ 62. 3. 27.～4. 1.

Associate professor Kim（キム助教授）　①京城大学、胸部外科（韓国）　②視察　③ 61. 12. 15.

Dr. R. Živojnovic　① Rotterdam Univ., Professor of Ophthalmology　②手術見学　③ 61. 12. 2.

Sang-Ha Kim M. D.　① Kyung-pook National University Hospital, Professor of Ophthalmology　②手術見学　③ 61. 12. 8.～12. 11.

蔡　錫圭　①国立台湾大学医学院、解剖学科教授　②台湾山地族学童の皮脂厚に関する共同研究　③ 62. 3. 9.～3. 12.

George Klein　①スウェーデン・カロリンスカ研究所、腫瘍生物学部長・主任教授　②講演「腫瘍免疫について」　③ 62. 3. 6.

Eva Klein　①スウェーデン・カロリンスカ研究所教授　②講演「バーキットリンパ腫に対する免疫反応」　③ 62. 3. 6.

AKOH J. I.　①ナイジェリアジョス大学動物学教室助教授　②寄生虫学教室を表敬訪問　③ 61. 11. 28.

DVANGPORN NACAPUNCHAI　①タイ・マヒドール大・医療学部寄生虫学教室助手　②寄生虫学教室を表敬訪問　③ 62. 1. 7.

冷延家　①中国、暨南大学医学部医学寄生虫学教室教授　②日本寄生虫学会大会特別講演の帰路、寄生虫学教室を表敬訪問　③ 62. 4. 21.

福岡大学医学会例会の報告

第16回例会

日時　昭和62年2月5日（木）　午後3時より

場所　福岡大学医学部臨床大講堂

座長　奥村　恂　教授

1.「肝生検所見からみた肝炎の経過について」　内科学第一　坂口　正剛　講師

2.「福大小児科での白血病・癌治療」　小児科学　丹生　恵子　助教授

3.「五十肩の概念と治療」　整形外科学　竹下　満　助教授

4.「パキスタンでの研究生活」　寄生虫学　赤羽　啓栄　助教授

教室便り

学位取得

中山　幸一（内科学第一）
福岡大学に提出。昭和六十一年十一月十三日付で医学博士授与。
論文名「慢性肝疾患における血清胆汁酸とその分画の臨床的意義」

原　健二（法医学）
福岡大学に提出。昭和六十一年十一月十三日付で医学博士授与。
論文名"Forensic toxicologic analysis of methamphetamine and amphetamine in body materials by gas chromatography/Mass spectrometry"

次の方は、昭和六十二年三月二十三日付で、福岡大学より医学博士を授与された。

土居　崇仁（内科学第一）
論文名「肝障害における血清アデノシンデアミナーゼ活性上昇に関する臨床的および基礎的研究」

池田　悟（内科学第一）
論文名「肝障害における血清 Guanase の上昇機序に関する研究」

渡辺　洋（内科学第一）
論文名「B型肝炎ワクチンに対する免疫応答の免疫遺伝学的解析」

桑原　健介（内科学第二）
論文名「Mycoplasma pneumoniae に対するモノクローナル抗体の作製：抗体特異性、抗原解析、及び、迅速抗原検出法の検討」

岡部　真典（内科学第二）
論文名「急性前壁中隔心筋梗塞後に出現する房室および心室内伝導障害の病理形態学的研究」

乙成　孝俊（内科学第二）
論文名「Shigella sonnei 100052 株の産生する bacteriocin の精製とその性状」

三月田洋一（精神医学）
論文名「追跡調査からみた神経症、うつ病の臨床」

鳥谷　裕（外科学第一）
論文名「Crohn 病に伴う肛門病変の臨床的特徴」

荒木　康雄（外科学第二）
論文名「心臓交感神経節におけるカルモジュリンの関与」

柴田　陽三（整形外科学）
論文名「肩関節における関節内圧的研究」

大森　章男（泌尿器科学）
論文名「カルシウム含有尿路結石症における高カルシウム尿の研究」

伊藤　實喜（解剖学第一）
論文名"An Ultrastructural study of the cysts in chicken ultimobranchial glands, with special reference to C-cells"（ニワトリ鰓後体嚢胞、特にC細胞に関する電子顕微鏡的研究）

安倍　正弘（薬理学）
論文名"Antagonism by taurine and γ-aminobutyric acid of the stimulating effects of Angiotensin II and renin on water and salt intakes in rats (Angiotensin II ならびに renin による水および食塩水摂取行動に対する taurine, γ-aminobutyric acid による抑制)

熊谷　雅人（薬理学）
論文名"Neuroendocrinological study of thyrotropin-releasing hormone and its analogues on body shaking behavior and prolactin secretion"（TRH および同類縁体による体振り行動誘発とプロラクチン遊離機構に対する神経内分泌学的研究）

原田　敏郎（薬理学）
論文名"Release of acetylcholine mediated by cholecystokinin receptor from the Guinea-pig sphincter of oddi（モルモットオッディ筋におけるコレチストキニン受容体を介したアセチルコリン遊離）

手島　康一（病理学第一）
論文名「大腸癌の癌細胞核DNAからみた臨床病理学的研究」

諫山　照刀（病理学第一）
論文名「悪性線維性組織球腫の起源について：単クローン抗体による免疫組織化学的分析」

岡村　秀樹（病理学第一）
論文名「Clinicopathological study of aplastic anemia… Review of 176 autopsy cases…

嶋田　敏郎（病理学第一）
論文名「クローン病の腸切除標本におけるリンパ球 subsets 検討」

竹下　盛重（病理学第一）
論文名「異常蛋白血症を伴う血管免疫芽球性リンパ節症 Angioimmunoblastic lymphadenopathy with dysproteinemia (AILD), 並びに関連病変の臨床病理学的検討」

楠本　泰博（病理学第二）
論文名"Long-term prognosis and prognostic indices of IgA nephropathy in juvenile and in adult Japanese."（日本における若年と成人 IgA 腎症患者の長期予後と予後の指標）

佐藤　隆（病理学第二）
論文名"Increased subendothelial permeability by coronary spasm, histological study of 14 autopsy cases with unstable angina"（冠攣縮による血管内皮透過性の亢進—不安定狭心症を有した14剖検例の組織学的検討）

鶴　信彦（病理学第二）
論文名「メサンギウム細胞の機能と形態——その動脈平滑筋細胞の特質——」

福島　克彦（病理学第二）
論文名「妊娠中毒症の腎病変に関する病理学的研究」

馬郡　良英（衛生学）
論文名「花卉ハウス栽培従事者の健康状態に関する調査研究」

秋吉　修治（歯科口腔外科学）
九州歯科大学に提出。昭和六十二年一月三十一日付で歯学博士授与。
論文名「歯科治療時における所謂脳貧血の心身医学的研究——歯科治療前、治療室状況における fainting 発症の準備因子について——」

受賞

八尾　恒良（筑紫病院内科消化器科）
内視鏡医学研究振興財団研究助成金
研究業績「内視鏡による Crohn 病病態へのアプローチ——全消化管の微細病変・生検標本の検討から——」

学術交流

昭和六十一年十一月以降の海外留学又は海外出張者はつぎのとおり。①研修先②目的③期間

海外留学

松田　年浩（脳神経外科学）①米国・カリフォルニア大学②神経眼科、脳神経外科臨床修練③62・4・1～9・31

海外出張

広木忠行、田代方民（内科学第二）①Washington, D. C., U. S. A. ②13th International Congress on Electrocardiology ③61・9・10～9・12

朔　啓二郎（内科学第二）
①中国②中国人の血中脂質および食事内容に関する研究③62・3・14～3・24

西園昌久、小林隆児（精神医学）①台湾②精神医療視察のため③62・1・8～1・11

福島　武雄（脳神経外科学）①米国・カリフォルニア大学及びバロー神経研究所②神経眼科学セミナー及び脳神経外科臨床③61・12・9～12・21

大島　健司（眼科学）①インド②インド硝子体手術講習会にて講演及び手術③61・12・27～62・1・6

清澤　崇晃（眼科学）①アメリカ②米国白内障・屈折・眼内レンズ手術学会にて講演③62・4・6～4・10

田川隆輔、石川　篤（解剖学第一）①中華民国②台湾医学会研究発表のため③61・11・8～11・10

波部　重久（寄生虫学）①北京・上海②日中寄生虫病セミナーにおける講演③61・11・1～11・14

田中　彰（筑紫病院・脳神経外科）①ドイツ、スイス②脳立体手術法の研修③62・3・21～3・29

新刊紹介

福大医学会会員が執筆した著書または単行本を以下紹介する。（①書名　②発行所　③発行年　④価格）

▽荒川規矩男（内科学第二）
①高血圧のすべて②メディカルチャー③一九八七・三④四、八〇〇円

▽内藤説也、朔啓二郎（内科学第二）①HLA IN ASIA-OCEANIA 1986（分担）②HOKKAIDO UNIVERSITY PRESS (SAPPORO)③一九八七④一八、〇〇〇円

▽西園昌久（精神医学）①各科領域における向精神薬の用い方、その実際、コツ、問題点……精神科（分担）②カレントテラピー③一九八六④五、〇〇〇円

▽西園昌久（精神医学）①治療と患者心理（分担）②情報開発研究所③一九八七

▽朝長正道（脳神経外科学）①今日の治療指針（分担）②医学書院③一九八七④一四、〇〇〇円

▽利谷昭治、林　紀孝（皮膚科学）①皮膚疾患最新の治療'87～'88（分担）②南江堂③一九八七④七、〇〇〇円

▽坂本公孝、有吉朝美、大島一寛（泌尿器科学）①新泌尿器科学（分担）②南山堂③一九八六④七、〇〇〇円

▽大島健司（眼科学）①硝子体手術②エッセクス日本③一九八七④非売品

▽曽田豊二（耳鼻咽喉科学）①耳鼻咽喉科・頭頸部外科学（分担）②医歯薬出版③一九八六、一二、三〇④九、五〇〇円

▽檀　健二郎、栗原雄三郎、眞鍋治彦（麻酔科学）（九州がんセンター麻酔科）①麻薬あるいは拮抗性鎮痛薬の硬膜外ならびにくも膜下腔投与、がん終末医療——疼痛治療を中心に——村上誠一編（分担）②真興交易医書出版部③一九八七④三、五〇〇円

▽井上幹夫（健康管理学）永田　晋（北九州市立小倉病院がんセンター内科）①クローン病（日本消化器病学会、クローン病検討委員会編）（分担）②医学図書出版KK③一九八七・三・三④六、八〇〇円

▽本岡健一（健康管理学）①健康医学とペイシェントケア、池田義雄編（分担）健康教育・患者教育のすすめ方の基本②ライフサイエンスセンター③一九八六④一二、〇〇〇円

▽都　温彦（歯科口腔外科学）①デンタルQシリーズ①新・歯科におけるくすりの使い方（分担）②デンタルダイヤモンド社③一九八七④四、九〇〇円

▽今永一成、稲冨久美子、亀井　律（生理学第一）①心臓活動の神経性調節とその病態、入沢宏、有田真編（分担）②九州大学出版会③一九八七・四・三〇④八、〇〇〇円

▽菊地昌弘（病理学第一）①カラーアトラス基礎組織病理学、15章、リンパ細網系 Lymphoreticular system, (Wheater, P. R., Burkitt, H. G., Stevens, A. and Lowe, J. S.)（編訳今井大）（分担）②西村書店③一九八七・四・六④四、九〇〇円

▽竹林茂夫（病理学第二）①Cell proliferation and glomerulonephritis（分担）②Nishimura③一九八六④一〇、〇〇〇円

▽重松峻夫、三苫むつ子、増田登（公衆衛生学）①癌の臨床、別集「がんの一次予防と二次予防」（分担）②篠原出版③一九八七・三④五、五〇〇円

▽重松峻夫（公衆衛生学）①地域がん登録の手引き、改訂第三版（分担）②厚生省がん研究助成金「がん予防・医療活動におけるがん登録の役割に関する研究」班③一九八六・十一④非売品

▽八尾恒良（筑紫病院・内科）①新臨床内科学、第5版（分担）②医学書院③一九八七・四④九、三〇〇円

編集後記

多くの方々が、新任または昇任によって加わられました。これらの方々によって新風が送られ、福大医学部のエネルギーがますます高まることでしょう（責古川）。

海外・国際学会研究発表

（発表者名：①題目　②学会名　③開催地　④年月日）

Okumura, M., Fujita, K., Yao, T. et al.（内科学第一）：① Cimetidine in acute upper gastro-intestinal hemorrhage. Cimetidine Round Table. ② International Conference. ③ Dubrovnik. ④ 61. 9. 4～9. 5.

Tadayuki Hiroki, Kazuo Moroe, Kikuo Arakawa（内科学第二）：① Morphologic configuration of QRS complex in the subsidiary pacemaker rhythm after a transarterial electrical ablation of atrioventricular junction. ② International Symposium on Cardiac Arrhythmia. ③ Kanazawa, Japan. ④ 61. 11. 4～11. 7.

Kazuo Moroe, Tadayuki Hiroki, Kikuo Arakawa, Yasushi Sasaki, Keisuke Fukuda（内科学第二）：① A mew technique of electrical ablation of atrioventricular junction by a transarterial approach in electrical ablation of atrioventricular junction. ② International Symposium on Cardiac Arrhythmia. ③ Kanazawa, Japan. ④ 61. 11. 4～11. 7.

Kikuo Arakawa, Jun Sasaki（内科学第二）：① Effect of nifedipine on serum lipid lipoprotein and apolipoproteins in patients with essential hypertension. ②第3回アジア・大平洋アダラートシンポジウム. ③ Jakaruta, Indonesia. ④ 62. 1. 31.

Keijiro Saku, Jun Sasaki, Setsuya Naito, Kikuo Arakawa（内科学第二）：① CAPD may accelerate atherosclerosis. ② 59th Scientific Sessions of The American Heart Association. ③ Dallas, Texas, U. S. A. ④ 61. 11. 17～11. 20.

Jun Sasaki, Kikuo Arakawa（内科学第二）：① Change in HDL subfractions by nifedipine treatment. ② 59th Scientific Sessions The American Heart Association. ③ Dallas, Texas, U. S. A. ④ 61. 11. 17～11. 20.

西園昌久（精神医学）：① A challenge to improvement of medical education in Japan—conference on "Changing community needs and future medical education" Kyoto and Kurashiki, Japan. June 24–28, 1986–. ② WHO National Workshop on Medical Education for the XXI Century. ③中国，北京 ④ 61. 11. 15～11. 22.

西園昌久（精神医学）：① Education and training in mental health. ② WHO The Third Regional Coordinating Group on the Mental Health Programme. ③フィリピン，マニラ ④ 62. 2. 13～2. 22.

大島一寛（泌尿器科学）：① Correction of vesicoureteral reflax with intravesical collagen. ② Meeting of Nesbit Day. ③ AnnArbor, Michigan, U. S. A. ④ 1986.

大島健司（眼科学）：① Vitrectomy: Complications and removal of silicone oil. Vitrectomy: Treatment of giant retinal breaks. Treatment retinovascular disease: Eales' disease. Treatment retinovascular disease: Other disease. ② 1st Indo-Japanese Ophthalmological Foundation. ③インド ④ 61. 12. 27～62. 1. 6.

清澤崇晃（眼科学）：① Age-related variability of complement activation by IOL materials. ②米国白内障・屈折・眼内レンズ手術学会 ③アメリカ ④ 62. 4. 6～4. 10.

田川陸輔・石川　篤（解剖学第一）曽田豊二・蘇　萬全（耳鼻咽喉科学）：① Angioarchitecture and innervation of nasal mucosa in rodent. ②台湾医学会 ③中華民国台湾省台北市 ④ 61. 11. 8～11. 10.

今永一成・稲冨久美子（生理学第一）：① The Ca-paradox and Na-Ca exchange. ② International Society for Heart Research. ③ Nagoya ④ 62. 2. 6～2. 7.

田口　尚（病理学第二）：① Ultrastructural changes of glomerular basement membrane in IgA glomerulonephritis: relationship to hematuria. ② 16th international congress of the international academy of pathology. ③ウィーン，オーストリア ④ 61. 8. 31～9. 5.

波部重久（寄生虫学）：① Metacercarial polymorphism in lung fluke. ② The 5th China-Japan Symposium of Parasitic Diseases. ③北京，上海 ④ 61. 11. 3～4.